

東京北一輝探訪 pdf 版

平成12年12月25日
平成15年2月1日(pdf化)
阿部敏雄(敏翁)

この旅行記は、平成9年(1997)9月佐渡のドライブ旅行のすぐ後、東京にある北一輝に縁の場所を車でほぼ一日かけて廻ったときのもので、本テキストの原文は、パソコン通信ネット N i f t y - S E R V E の S I G F T A B I の会議室図書室 私の旅日記(旅の思い出)に掲載したのですが、それを主体としてそれに画像を加えて纏めてみました。

尚、「敏翁」は私のニックネームです。

目次

(見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

I. 目黒不動と瀧泉寺墓地	1
II. 二・二六事件慰霊像(渋谷)	4
III. 二十二士の墓(麻布・賢崇寺)	6

【東京】北一輝探訪

敏翁

「【佐渡】北一輝の故郷紀行」を纏める為に、図書館で調べている内に

長谷川義記「よみがえる北一輝 その思想と生涯」 上、下 月刊ペン社 昭和48年発行

という本を見つけた。

内容は、私には思い入れが激しすぎるように思えてあまり感心しなかったが、口絵に以下の写真が載っていたのが参考になった。

- | | |
|-----------------|---------------------------------|
| 1) 北一輝の碑 | 東京目黒不動境内 |
| 2) 北一輝の墓 | 東京目黒瀧泉寺墓地内
この墓地には、大川周明の墓もある。 |
| 3) 二・二六事件慰霊像 | 東京渋谷公会堂横 |
| 4) 二・二六事件二十二士の墓 | 東京麻布「賢崇寺」墓地内 |

北一輝の遺骨は、佐渡の「勝広寺」墓地の墓、と上記2) 瀧泉寺墓地の墓及び4) 「賢崇寺」墓地の墓に分骨されているらしい。

それで、北一輝ゆかりの上記1)～4)を一日掛けて車で探訪する事にした。

探訪中に、これらに深く関わっている「仏心会」という団体が有ることが解り、「探訪」から帰ってから又図書館で調べ、仏心会代表の河野司氏の著作「ある遺族の二・二六事件 半生の記」河出書房新社 1982 を見つけた。

その内容は、関係するところで記すことにする。

I. 目黒不動と瀧泉寺墓地

朝10時、自宅(横浜・鶴見区)を出発。国道一号線を上り、戸越の首都高入り口付近から桐ヶ谷通りに入る。この道は狭い道路だが一本道で、目黒不動尊(泰叡山・瀧泉寺)の仁王門に到着する。

その横が広い駐車場に成っている。

その駐車場に接して独鈷の瀧、前不動尊、腰立不動、勢至堂などの宗教施設の間に、甘藷先生碑、本居長世(「赤い靴」などの童謡作曲家)碑に並んで、やや奥まって木立に隠れるように北一輝碑が立っていた。

可成り大きい碑（高さ約3m）で、上に横に「北一輝先生碑」と彫って有るが、これは、生前一輝と親しかった、国民党の外交部長であった張群氏による書だと言う。



目黒・不動境内 中央の木陰に北一輝の碑がある

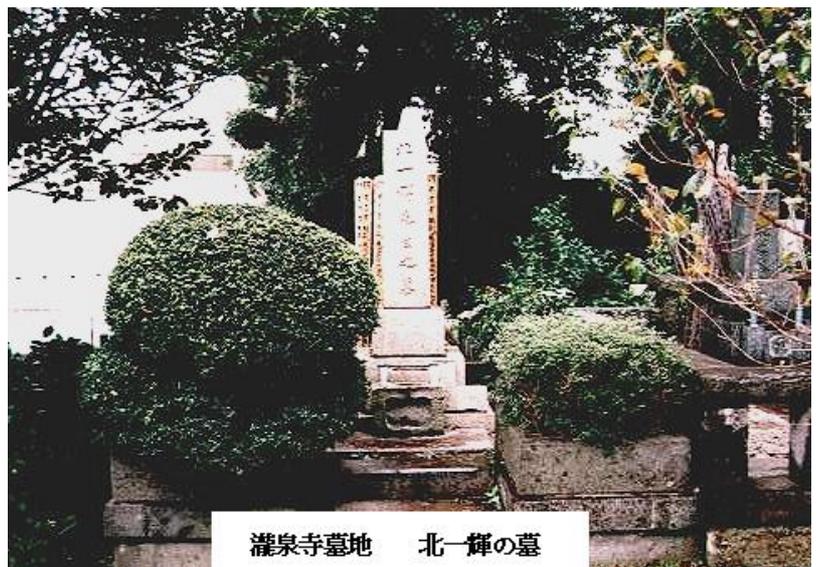
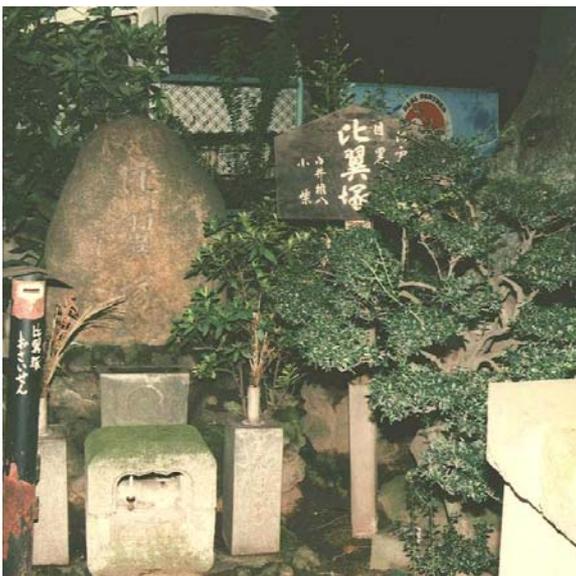


北一輝碑

碑文は大川周明に依るものである。

『歴史は北一輝君を革命家として伝えるであろう然し革命とは順逆不二の
法門その理論は不立文字なりとせる北君は決して世の常の革命家で
はない君の後半生二十有余年は法華経誦持の宗教生活であったすでに
幼少より換発せる豊麗多彩なる諸の才能を深く内に封して唯に大音声
の読経によって一心不乱に慈悲折伏の本願成就を念じ専ら其門を叩く
一個半個の説得に心を籠めた北君は尋常人間界の繩墨を超越して仏魔
一如の世界を融通無礙に往来して居たのでその文章も説話も総て精神
全体の渾然たる表現であったそれ故に之を聴く者は魂の全体を挙げて
共鳴したかくして北君は生前も死後も一貫して正に不朽であろう
昭和三十三年八月 大川周明撰 玄林武田梅書』

碑文は勿論縦書きであるが、上記は行も本物に合わせてある。



瀧泉寺墓地 北一輝の墓

折角来たのだからと、本堂にもお参りし、仁王門の斜め前にある白井権八、小紫の比翼塚(上左図)を眺めた後、瀧泉寺墓地を探すのが分かり難い。

今日は今朝から曇り空ではあったが、ここに来て激しく雨が降り出した。
佐渡でも、一輝の墓は雨の中での参りだった。何か因縁のようなものを感じた。

駐車場のあたりがバスの終点になっていて係員の詰め所がある。そこで道を尋ねて墓地にたどり着いた。(徒歩3分ほど) 小高いところに、北一輝の墓はあった。(前頁右図)

正面に「北一輝先生之墓」とあり、一輝の門下生によって建てられたものである。一輝自身、鈴子夫人、大輝の遺骨が納められている。

墓の裏側には、びっしりと数多くの新しい卒塔婆が立っていた。今年(1997年)の8月19日(一輝の命日)付けの追善供養のためのものであり、一輝の人気は未だ衰えていない事を示している。



一輝の墓の向かいに「大川周明」の墓があるとの事で探す、真向かいではなく、一つ墓を距てたところに

大川周明
之墓
同 兼子

と彫られた墓が一輝の墓に向き合うように建っていた。この墓は、兼子夫人によって建てられたものである。周明死去は昭和32年。と言うことは、上記碑が建ったときには周明は死んでいた事になる。その隣に、大川家先亡の各霊菩提の為の五輪の塔が立っている。後ろには、卒塔婆が2本立っていたが、これは大川家が先祖代々の供養のために立てたもので、一輝のそれと比べると誠に寂しい。

野島よしあき(「あき」がJIS第二水準にも無い漢字を使っている)氏「大川周明」新人物往来社 昭和47年 によると

『一般の人々の印象では、東京裁判の時に東条大将のハゲ頭をたたいてみせた気遣いか、哀れな道化役者ぐらいにしか、それもほんのかすかな記憶としてしか残っていない。』とある。

私の印象もそれに近いものだったが、今回上記書などに目を通してみると、大川周明は、実に偉大な学者である事が解ってきた。

ただアジアの民衆が西欧諸国に虐げられている状況に対する心の底からの激情から政治活動に乗り出し、時代の激しい流れに押し流されたのであった。

周明の思想は、一輝のそれより視野が広く、イスラムの世界までを含んでアジアの復興を考えていた。

彼は、東京裁判中に、精神錯乱に陥り松沢病院に送られたが、そこで回復した後、「コーラン」の翻訳に取り組んだのであった。

回復した後も彼が裁判から除外された事は、東京裁判の謎の一つであると云う。野島さんは、正常な周明が、「近世ヨーロッパ植民史」から「東亜侵略史」に至る彼の蘊蓄を傾けて、キーンン検事と議論を闘わせたら面白かったろうとしている。

大川周明は、北一輝の「日本改造法案大綱」に強く影響を受けたが、やがて北と激しく対立した。しかしながら大川は、後年獄中に交わした北一輝の手紙を発表してその宗教的生活、実は仏魔一如の世界を肯定している(長谷川)。

これが碑文に繋がっていったのである。

ここの北一輝の墓については、その経緯についての記述が、上記河野司さんの本にあるので、紹介(一部省略有り)する。

『北一輝の遺体は、鈴子夫人、令弟玲吉氏らによって引取られ、火葬後その遺骨は、三つに分けて処置されたよ

うだ。一つは玲吉氏によって郷里佐渡の菩提寺法勝寺（＊）に埋葬され、一つは鈴子夫人の許に、一つは賢崇寺の合同祭祀のために分骨されたと思われる。

北一輝家は、その養子、大輝は支那革命参加当時の同志、譚人鳳の孫であり、戦時中上海で病死し、鈴子夫人は昭和二十五年に東京杉並の一輝因縁の家で死去した。

ここに埋葬されてある遺骨については次のような経緯がある。

鈴子夫人は長崎の出身で、夫人の死により生前手許にあつて祀られていた分骨は、夫人の遺骨とともに長崎の寺に埋葬されたい。

戦後になって昭和三十三年、自黒不動尊境内に「北一輝先生碑」が大川周明博士の碑文を銘して建立され、革命児北一輝を改めて新しい日本に訴えるところがあった。こうした折に、昭和四十年頃、北門下の辰川、里見氏ら主な人々によって長崎にある分骨を東京に移葬することが練られ、その墓所を二十二士が眠る賢崇寺に求め、藤田住職の好意により仮の墓標の下に埋葬を行った。辰川氏らによって正式の墓石建立が進められていたようだが、二年余の後、大川周明博士の死によって、同氏の墓が目黒不動尊隣接の墓地に建立されたことによって、辰川氏らは大川周明墓の正面に向い合つて、北の墓を建てることを発意し、さきに賢崇寺に葬った遺骨を、不動尊に移葬することを決め建墓資金の募金に奔命した。藤田賢崇寺住職の先の好意を無にするものであったが、昭和四十六年「北一輝先生の墓」の完成によって、北一輝の遺骨は三度自のこの墓におさまることになった。開眼供養の式に私は仏心会として生花を供え、代表として参列したが、藤田師の姿はなかった。』

＊：法勝寺は勝広寺の誤り。「【佐渡】北一輝の故郷紀行」で参考にした豊田 さんも同じ誤りをしている。誤りの源は河野さんらしい。

今年の卒塔婆にも仏心会のものが入っていた。

本節の終わりに『ありし日の夫、北一輝』と題して〈『女性改造』昭和二十五年二月号〉に掲載された北一輝の鈴子夫人の手記の一部を紹介しよう。

（豊田さんの本からの引用である）

『結論的にいえば、妻から見た北は、その純情さにおいて子供のような純粋さ、素直さがありますが、彼は結局、革命家でもなければ、政治家でもない。学者でももちろんない。自分自身の生涯――言行、態度のすべてを一枚の絵のように綺麗に書きあげようと努力した芸術家ではなかったでしょうか。ですから、世俗的な幸福はこの人にとっては問題ではなかったでしょう。あの人の幸福は、あの劇的な多彩の生涯の中に見出されるのではないのでしょうか。

先年のことであります。文理大の竹田博士（竹田復、中国文学者、東大支那文学科卒、一高教授を経て戦後、東京文理大教授、東京教育大教授、日大教授、大東文化大教授）や古賀武氏の御世話で、来朝された張群さんにお会い申した時に私はつくづくそんな気がしました。

処刑の前日でした。妻たる私に対してさえ威儀を正しくしていうのに、「長い間、よく仕えてくれた。今こそあらためて礼をいうぞ、これこの通りだ」と手をつかえるではありませんか。妾は「もったいない」と申し上げただけ、今でも、その時のことを思い出すと泣けて泣けて止処が御座いません。』

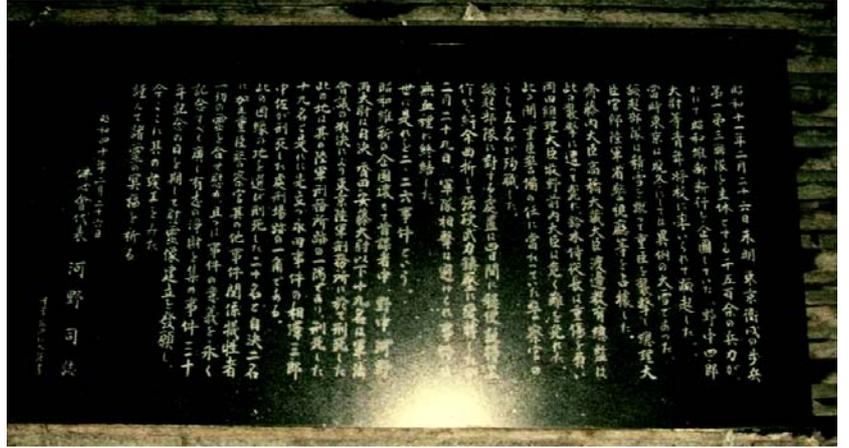
鈴子夫人は此の年に亡くなっている。

Ⅱ. 二・二六事件慰霊像（渋谷）

目黒不動商店街を抜け、山手通りを新宿方面に進む。富ヶ谷の交差点を右折、代々木深町の交差点を再び右折し、NHK放送センター沿いに進み、左折して地下駐車場に入る。丁度渋谷公会堂の地下に当たる所である。

慰霊像は、厳密には公会堂横ではなく、その隣にある法務局横のT字路の角の所にあった。見上げる様な高さに、右手を上あげ天の一角をを指さす変わったポーズの観音像が立っていた。（次頁左図）

これが、二・二六事件慰霊像である。



この建立については、河野司さん達が大苦勞したようで、そのいきさつの詳細は、河野さんの本にある。観音像の台座の側面にはめこんだ、**黒い大理石**にこの像の由緒書の碑文が彫込んである(上右図)。それは歩道に直面していて時々通行人が足をとめていた。日展書道審査員、花田峰堂氏の書である。その碑文を以下に記す。

『昭和十一年二月二十六日未明、東京衛戍の歩兵第一、第三連隊を主体とする千五百余の兵力が、かねて昭和維新断行を企図していた野中四郎大尉等青年将校に率いられて蹶起した。当時東京は晩冬にしては異例の大雪であった。蹶起部隊は積雪を蹶って重臣を襲撃し、総理大臣官邸、陸軍省、警視庁等を占拠した。齊藤内大臣、高橋大蔵大臣、波辺教育総監は此の襲撃に遭って斃れ、鈴木侍従長は重傷を負い岡田総理大臣、牧野前内大臣は危く難を免れた。此の間重臣警備の任に当たっていた警察官のうち五名が殉職した。蹶起部隊に対する処置は四日間に穏便説得工作から紆余曲折して強硬武力鎮圧に変転したが、二月二十九日、軍隊相撃は避けられ事件は無血裡に終結した。世にこれを二・二六事件という。昭和維新の企図壊えて首謀者中、野中、河野両大尉は自決、香田、安藤大尉以下十九名は軍法会議の判決により、東京陸軍刑務所に於て刑死した。この地はその陸軍刑務所の一隅であり、刑死した十九名と是れに先立つ永田事件の相沢三郎中佐が刑死した処刑場の一角である。この因縁の地を選び刑死した二十名と自決二名

に加え、重臣、警察官その他事件関係犠牲者
一切の霊を合せ慰め、且つは事件の意義を永く
記念すべく、広く有志の浄財を環め、事件三十
年記念の日を期して慰霊像建立を発願し、
今ここにその竣工を見た。
謹んで諸霊の冥福を祈る。

昭和四十年二月二十六日

仏心会代表

河野 司 誌
峰堂花田仁人謹書』

この碑文も勿論縦書きであるが、上記は行も本物に合わせてある。

上の碑文にある刑死者は、

昭和11年7月3日 相沢三郎（昭和10年8月12日永田鉄山を刺殺）、

昭和11年7月12日 青年将校たち15名、

昭和12年8月19日 4名（この中に北一輝が入っている）、

自決者は、野中四郎、河野寿である。

尚、河野司さんは、この寿さんの実兄である。

公会堂のそばの商店街で、軽く昼食。午後1時頃、麻布賢崇寺に向かう。

Ⅲ. 二十二士の墓（麻布・賢崇寺）

代々木深町に戻り、右折し五輪橋を渡って表参道を抜け、左折して青山通り（246）に入る。青山一丁目の次の通りを右折六本木方面に走る。

高速（3号渋谷線）の下を通り、六本木5丁目で右折、鳥井坂を下る。

そのまま一の橋に続いている広い道を突っ切り細い道に入る。ここから分かり難く、2度ほど道を尋ねて、賢崇寺への専用坂道を登ったところが

賢崇寺であった。

河野さんの本から引用する。（）内は敏翁。



『賢崇寺は麻布十番の高台にあり、今から三百五十年余前、鍋島家三代の主、忠直の菩提を弔うために建立された由緒ある寺で、興国山賢崇寺と号された鍋島家の菩提寺である。

緑の木立に包まれて都内とは思えない閑寂な境内に、**鍋島家歴代の墓（左図、五輪の塔の形式に統一されている）**が並び、旧藩主、大名の豪勢さを偲ばせている。鍋島家の領地は佐賀であり、藩主のほか藩士の人々も檀家としてその墓も多く、したがって佐賀藩士族のお寺でもあった。

曹洞宗派の寺で住職の藤田俊訓師も佐賀人であった。

事件参加の将校中、佐賀出身は、香田大尉、栗原中尉、中橋中尉、中島少尉の四名が刑死している。（佐賀人が多いのは葉隠れ精神の影響が考えられ

る)

このうち栗原家が賢崇寺の檀家であった。こうした関係が事件犠牲者との深い結びつきの因縁となったのであるが、とりわけ、住職藤田師の毅然たる信念と献身的な協力による賜であった。』

栗原安英中尉の敵父は陸軍大佐栗原勇氏で、以上の関係もあり、「護国仏心会」の創立者であった。

戦前22霊の分骨箱を納めた厨子が作られたが、これは昭和20年春、戦災によって、賢崇寺ともども灰燼に帰している。

戦後は、栗原氏も高齢で、河野さんが仏心会（戦後「護国」の字を取った）の代表となり、いろいろご苦勞もあったが（その詳細は河野さんの本にある）、昭和27年7月12日、17回忌法要に合わせて「二十二士之墓」開眼供養を行うに至ったのである。

境内、墓地も広く道案内などは無く、探すのに大分苦勞した。墓地の清掃などを行っている業者の人に聞いてやっとたどり着いた。この人は、五輪の塔は素晴らしいよとそちらを奨めてくれた。（帰りにこちらも拝見したが確かに素晴らしいものである）



墓地の大分奥にこんもりした樹木があり、その下に思ったより小さな「二十二士之墓」があった。墓前には僅かな花と赤ワインのボトルが一本捧げられていた。

その赤ワインを墓に掛け、ワインの芳香の漂う中で手を合わせた。

墓石は、自然石を板状に加工したもので彫りも浅くあまり立派なものではない。この建墓には、資金不足もあった為、石屋とトラブルになり、出来上がったのが、12日の正午頃だというようなエピソードも河野さんの本にある。

墓石の裏、別のお墓との間隔は狭く、墓石の裏を見るのに大苦勞した。

そこには、二十二士の命日別に氏名が刻まれていた。

尚、河野さんの本によると、上記栗原家の墓、及び水上源一の墓も賢崇寺にあるらしい。しかしこの事は、この「探訪」から帰った後に解った事なので、残念ながら見ることは出来なかった。

しかし、今回の「探訪」の目的は、あくまでも北一輝なので、これにて、東京にある北一輝関係の遺跡探訪をひとまず終わりとしたい。

一の橋――>桜田通り――>国道一号線と走り帰宅したのは、午後3時を少し回った頃だった。

『完』

敏翁